新入園・新入学 児童の心得帳

四月から新しく入園・入学する子供さんを持つ家庭では、健康のことをはじめ、うまく集団生活を送れるだろうか、友人はできるだろうか、交通事故にあわないだろうか——考えれば考えるほど心配のタネがつきないと思います。そこで、入園・入学にあたって、お母さん方に気をつけていただきたい心得のいくつかを紹介しましょう。

"心の疲れ"を見抜こう

勝気な子供が幼稚園や学校に行きたくない時は「イヤ！」と口に出してゴネますが、内気な子供は腹が痛いとか頭が痛いとか言って間接的に表現します。

いやになった理由は、と聞くとランドセルが友人のよりよくないとか、帽子を友人にひやかされたとか、ちょっとしたことが原因になっています。

また、幼児的な感覚から背の高い先生とか声の大きな先生を怖がったり、授業中トンチンカンな答えをしたために笑われ、そのショックで登校拒否を起こすのも、よくあるケースです。

子供は、今までの遊び中心の生活とは全く違った環境に身をおくのですから、集団生活に一日でも早くなじめるように指導し、励ましてやってください。

では、どうすれば学校ぎらいになるのを防げるかと言うと、お母さんとしては、まず子供が心理的に疲れていないかどうかを見分けることが先決です。学校に行くのをいやがっても、一方的に叱らず、入園、入学の喜びを知らせるような温かい心づかいがほしいものです。

気をつけたい子供の動作

通園あるいは通学し始めて一～二週間もすると、緊張感などが積み重なってどっと疲れが出てくるものです。

疲れの症状としては、朝なかなか起きられなかったり、頭痛、便秘、下痢になる場合もあります。

その他、親が意外に気がつかないのは子供の近視、乱視、弱視、耳が聞こえないといった症状です。

大人に頼りすぎる子供のしつけ方

保健婦・島本　せつ子

長岡地区での三歳児検診に来所した二百人（四十九年～五十二年）について、お母さんの相談を分析してみますと、食事に困っているという訴えが一番多くて四十八人（二十四％）次に多かった訴えは子供が大人に頼りきるので困っている三十四人（一七％）そのうち①二十人は何かしてほしい時、手伝わないでいるとだれかにやらせようとする。②十四人は今までやっていたのにやってもらいたがるので困っているという相談でした。

どうして大人に頼りきるようになったかについて（おききしてみますと）、①の場合は、親の溺愛と過保護、養育者の子供への態度が一致していないことでした。

初めての子供のとき、身体が弱い場合溺愛や過保護になりやすいものです。また心配性や苦労性の親もそうなりがちです。このような親は必要以上に心配し、子供をひとりで歩かすと自動車が危い、何々しては風邪を引きはしないか、あんなやんちゃな子と遊ばせるといじめられはしないかと、結局は親の気持で子供をしばりつけているのです。そして手をかしてしまうので、子供は不満や困難に耐える力をもてなくなります。そして両親の一方の甘い方へよけいに依存していくでしょう。両親の養育態度に問題はなくても、おばあさん、おじいさんが甘えさせるような場合も同じです。両者の差が大きいほど子供は甘い方へ逃げこんでしまいます。俗にいうおばあちゃん子がこれにあたります。おばあさんのもとで作られた弱い心では両親のふつうのしつけにさえ耐えられなくなります。

②の場合は下にできた弟妹へのしっと心から甘えたり泣きむしになっていることでした。

自分でご飯を食べていたのに食べさせてもらいたがったり、外で遊べるようになっていたのにお母さんのそばにいつもくっついていたがったりするというように逆もどりする場合、下の子が生れてすぐとか、しばらくしてから急にこんな状態になることが多いのです。

◎甘やかしや過保護をやめること

病弱のため依頼心がつき、泣きむしになっている子や、身体が不自由で手助けがいるような場合には、必要最少限の心配や手助けをしても、それ以上は保護を与えないようにしなければなりません。自信をなくしている場合もありますので、その子ができることをさがして、小さなことからほめてやり、またできたことを感心して自信を与えるようにしてください。

病弱でない子には泣いたりわがまゝをいっても効果はないということを知らせることが大切です。一度ついた習慣はなかなかなおりませんが、子供のがんばりに負けないようにしなければなりません。

◎自主的な習慣をつけること

服をきる、歯をみがく、おもちゃをかたづけるなど、よい習慣をつけようと、どのお母さんも努力します。甘やかしと過保護の親はつい手伝ったり、時間がかかってしかたがないとか、親がする方が早いという気持になり、子供がひとりでする機会をうばっているのです。子供は急にはうまくできません、最初はすべてお母さんが、次に半分手伝ってやる。子供のできる所はやらせる。それからだんだんお母さんの手伝を減らし、横で見守りながら励ましたり、じょうずにできなくてもほめてやるようにします。子供の遊びの場合でも、どの遊びをするか親が決めたり、危いから禁止したりしないことです。よほど危険なことでない限り子供のうちからわきあがってくる力を十分に引き出してあげましょう。

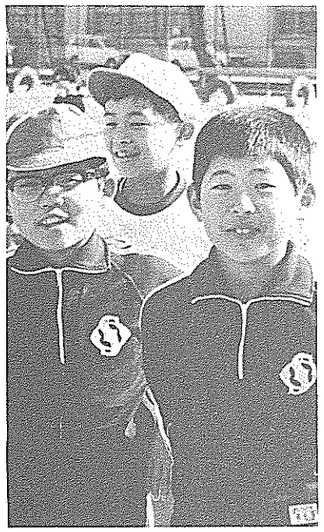
◎しつけの態度は急変しないこと

長い間身についてきた習慣や態度を変えようとするとき、急に親の態度を変化させてうまくいかない場合があります。とくに依存心の強い子は不満に耐える力が弱いので習慣や態度を急に変えるとよけいに子供をわるくすることがある急激な強制的指導には、耐えられません。子供の要求に負けてしまっている場合には依存させるような一貫性のない扱いはしないように心がけましょう。

（参考図書・林勝造著『むずかしい子の指導法』）

子供が授業についていけないのでよくよく原因を調べてみて初めてわかったという例がよくあります。ふだんから担任の先生とよく連絡をとり、子供の体調をしっかりつかんでおくことが大切です。

まず、友人づくりを



これまで家庭の中で、"お山の大将"を決め込んでいた子供たちも、幼稚園や学校に入ると周囲は見知らぬ顔ばかりです。しかし、友人づくりは急速に進みます。一日も早く友人をつくることが、子供たちにとって通園、通学をより楽しいものにする第一の秘けつです。

自己主張の強い子は協調性に欠けるところがあり、集団の遊びになじめず、すぐけんかを始めたりします。また、口の重い子とか神経質な子供は、集団生活のなかでがまんすることがなかなかできません。こういった性格の子供に対しては、母親はそれとなく手助けをしてあげ、一日も早くみんなと一緒に遊べるように導いてやってください。

近くに同じ年ごろの子供がいなかったり、適当な遊び場所がなかったりすると、子供はどうしても家にとじこもりがちになります。外につれ出して一緒に遊んでやるとか、友人を見つけてやるように心がけたいものです。また逆に、自分の家に友人を呼ぶなど、積極的に家庭を解放するのもよいでしょう。

友人関係で気をつけたいのは、子供の前で友人の欠点を口にしないことです。単なる大人の感覚で子供の世界をのぞかないようにしましょう。

約束や規則を守る子に育てよう

用便や洗顔、食事のあとかたづけ、衣服の脱ぎ着など身のまわりのことは自分でするようにしつけ集団生活の規則やエチケットをわきまえさせることが大切です。

また、対人関係のエチケットとしては、「はい」「いいえ」「あありがとう」「すみません」をはっきり言えるようにしておきたいものです。

ところで、決まりや約束が守れたら、忘れずにほめてやりましょう。

交通事故に注意

子供の交通事故の発生しやすい時間は、下校時あるいは下校時後の一～二時間の間に最も多く発生しています。特に、午後四時～六時までの時間が要注意です。

なお、曜日別では、土・日曜日の発生が目立っています。

行動半径のせまい子供の事故は自宅近くが最も多く、特に半径五〇㍍以内が危険地帯です。